8.　ﾋﾟｰｸﾌﾛｰﾒｰﾀｰによる気管支喘息患者の周術期管理の有用性について

（内科学第三）松村 康広，沖田 美佐，馬島 英輔，小口 安美，丸岡 教隆，森田 園子，玉木 利和，露口 都子，新妻 知行，林　徹
（麻酔科学）　曽我部 豊，一色 淳

【目的】気管支喘息患者の周術期合併症の出現の有無について検討した．
【対象】平成10年3月より11年3月まで全身麻酔下に手術を予定された喘息患者．男性6例，女性3例．15才～77才(平均52.1才)ｱﾄﾋﾟｰ型4例，非ｱﾄﾋﾟｰ型5例．
【方法】厚生省・ｱﾚﾙｷﾞｰ研究班ｶﾞｲﾄﾞﾗｲﾝにより重症度分類の上，PEFRにてﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞし，ｽﾊﾟｲﾛﾒﾄﾘｰを測定．
【結果】間欠型4例，軽症持続型1例，重症持続型4例．術前2週間のPEFRは，ｸﾞﾘｰﾝｿﾞｰﾝ1例，ｲｴﾛｰｿﾞｰﾝ6例，ﾚｯﾄﾞｿﾞｰﾝ2例．麻酔導入後血圧低下，術中CVP上昇，術中血圧上昇が認められたが，喘息との因果関係は乏しいと考えられた．関連の示唆された合併症として1例に無気肺が認められた。この症例はﾚｯﾄﾞｿﾞｰﾝで術前発作を認め%VC最低値例であった．
【考察】PEFRは術前のﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞに適しているといえるが，罹患歴の長い，LowPEFRの症例では重症度の評価が困難で，ｽﾊﾟｲﾛﾒﾄﾘｰ測定の併用が望まれると考えられた．

9.　C-ANCA 陰性ウェゲナー肉芽腫症の臨床所見に関する検討

（八王子・腎臓科）　吉田雅治、伊保谷憲子、稲田英毅、金子尚子、岩堀　徹

ウェゲナー肉芽腫症（WG)は、①上気道と肺の壊死性肉芽腫、②壊死性肉芽腫性血管炎、③壊死性半月体形成腎炎を三主徴とする全身性血管炎を呈する疾患であり、近年 C(Proteinase-3[PR-3]) ANCA が高率に陽性を示し、診断および治療の臨床的指標として注目されている。しかし、WG で 100%C(PR-3)ANCA が陽性を示すわけではなく、欧米および本邦にても C(PR-3)ANCA 陰性 WG の報告が認められる。今回、C(PR-3)ANCA 陰性 WG7 例の臨床所見について検討した結果、P(MPO)ANCA が全例陽性を示し、全例女性で、中高年齢発症で、難聴、中耳炎症状を含め耳症状が必発で、中枢、末梢神経症状を高率に呈していた。組織学的には、肉芽腫性炎、壊死性血管炎を示したが、壊死性半月体形成腎炎を示す症例はみられなかった。MPO-ANCA 力価の変動および白血球シンチの陽性所見は WG の活動性をよく反映しており、免疫抑制剤、ステロイド剤の併用で86%が寛解した。

特別講演　細胞性免疫による体内制御

日本医科大学微生物学免疫学教室　高橋秀実

我々の身体に内在する生体防御システムとしての免疫系は、体内に侵入した「非自己」である異物、あるいは体内に発生した癌細胞やウイルス感染細胞のような「異常自己細胞」を速やかに排除し、生体の恒常性を維持する働きを有している。このような異物として、遺伝子が蛋白質の殻で被われた自己複製能を持たないウイルスを想定した場合、ウイルスが細胞外に浮遊している場合には単なる非増殖性の浮遊物としてその表面に結合し、マクロファージや好中球による貪食排除を促す抗体を主体とした「体液性免疫」が異物排除の鍵を握る。これに対し、ウイルスが細胞内に侵入し複製・増殖を開始した場合には、その表面にCD8分子を有したキラーT細胞を中心とした「細胞性免疫」が発動され、アポプトーシスというウイルス情報の消去を主体とした細胞死が惹起される。本講演では、後者の「細胞性免疫」に焦点を合わせ、感染細胞や癌化した自己細胞がどのように体内で制御されているのか考察するとともに、こうした「細胞性免疫」の真の存在意義について最新の知見を基に考えてみたい。